

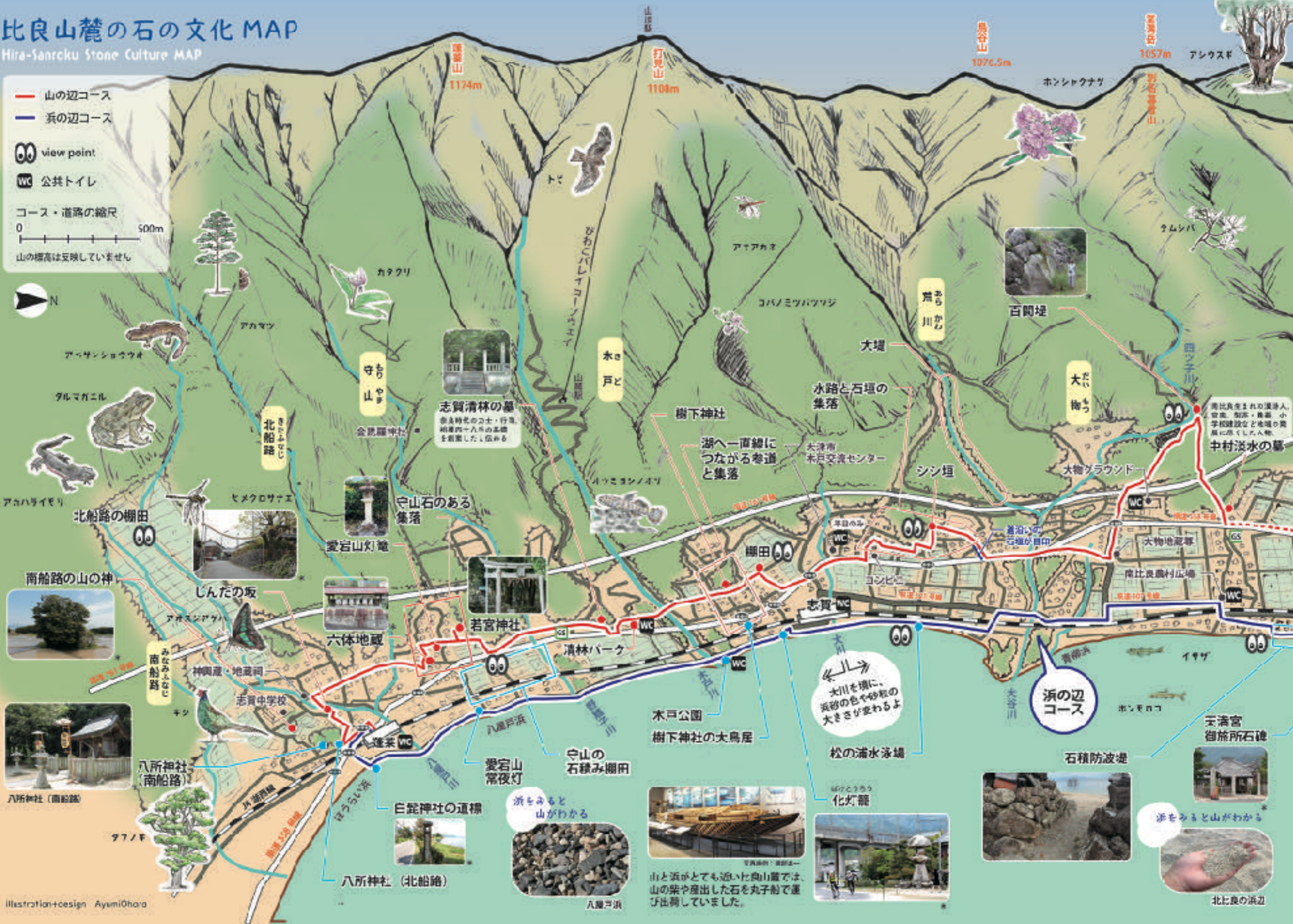
比良山麓の石の文化 MAP


Hira-Sanrcku Stone Culture MAP

- 山の辺コース
- 浜の辺コース

- view point
- 公共トイレ

コース・道路の縮尺
0 500m
山の標高は反映していません





『車は、湖岸に沿って走っている。右手に湖水を見ながら堅田をすぎ、真野をすぎ、さらに北へ駆けると左手ににわかに比良山系が押しかぶさってきて、車が湖に押しやられそうなあやうさをおぼえる。

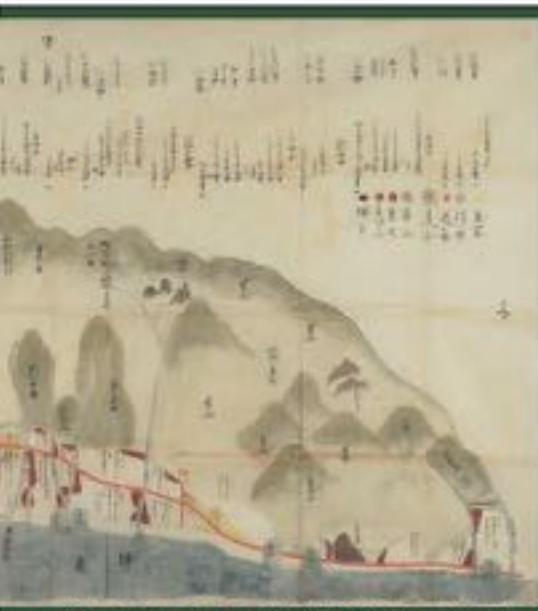
(中略) 山がいよいよのしかかるあたりに、「小松(北小松)」という古い漁港がある。(中略) この漁村を通りすごそうとしてふと**自然石を組んだ波ふせぎ**が古い民芸品をみるように鄙寂びているのに気づき、降りて浜へ出てみた。』

司馬遼太郎著「街道をゆく 湖西のみち 楽浪の志賀」(昭和46年)

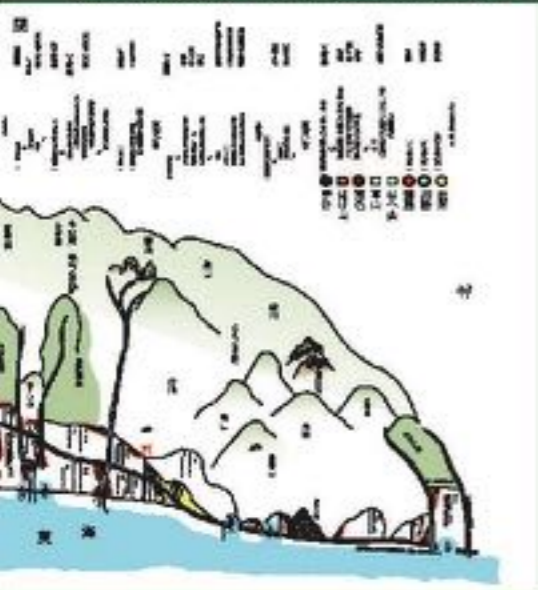
昭和31年

「鑑岩から望んだ北小松の街並み」大津・志賀の今昔(郷土出版社,2005)

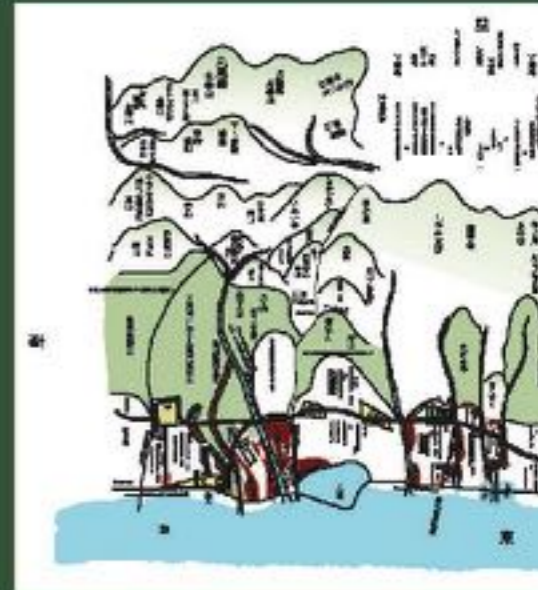




地図 上「北小松・南小松・北比良村地図」(北比良村歴史館蔵) / 下「トレース」



Eco DRR
国土地理院環境学研究所
Eco-DRR プロジェクト
調査機関：大津市歴史博物館
デザイン：島内啓祐
発行：2017年3月



この地図は、寛文九年(一六六九)七月、幕府領であった時の北小松・南小松・北比良村を描いたものです。裏書には、各村の庄屋・村長らが立会って念入りに、田畑・屋敷敷・荒埔・川筋、さらに神山・入会地(共有地)の詳細を書き上げたという事です。

その後面を細かくみていくと、各村の領主情報や村高・家数、また鎮守(神社)の位置や河川、街道情報を読み取ることが出来ます。一方で、山手に目を転じてみると、数々の山・谷にはそれぞれ名前が付けられるとともに、早山・柴山など利用状況に応じた区別が併記されています。

さらに荒地や「はげ山」、水災害の情報もうかがえます。

また、土地情報だけでなく、北小松の「上らい岩」や「瀬山」(橋梅の瀬)、また近江舟子の内湖や舟入なども描かれています。

本図は江戸の前期の北比良山麓北部に使われる石工を含めた人びとの生活空間を読み取る貴重な地図といえるでしょう。

比良山麓石工鳥瞰図

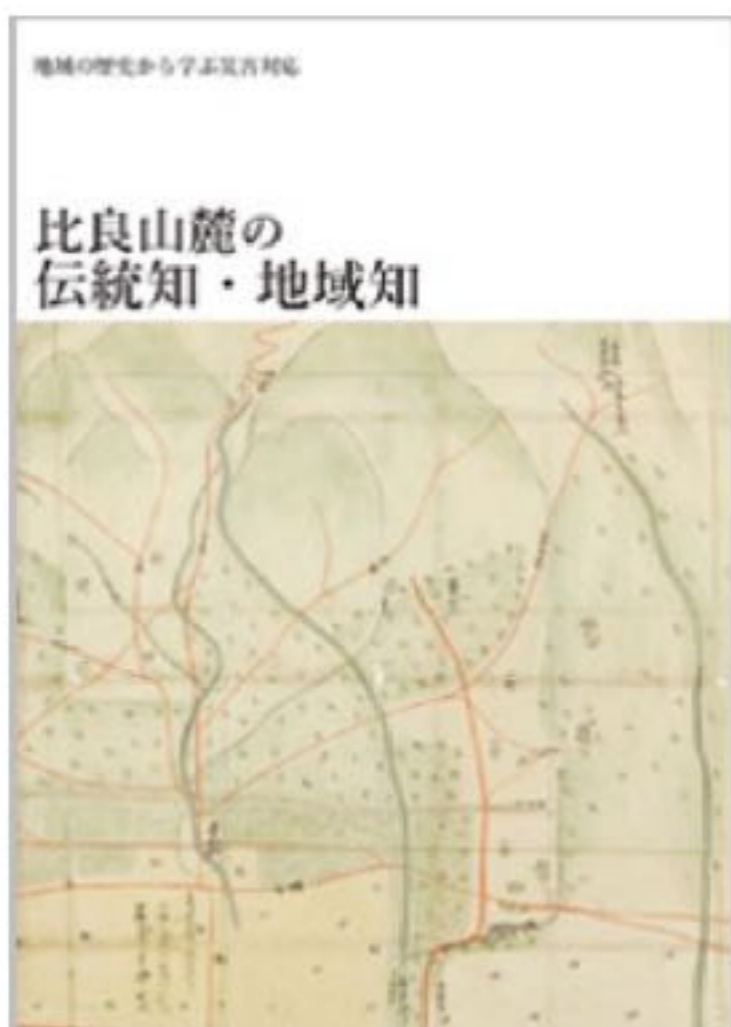
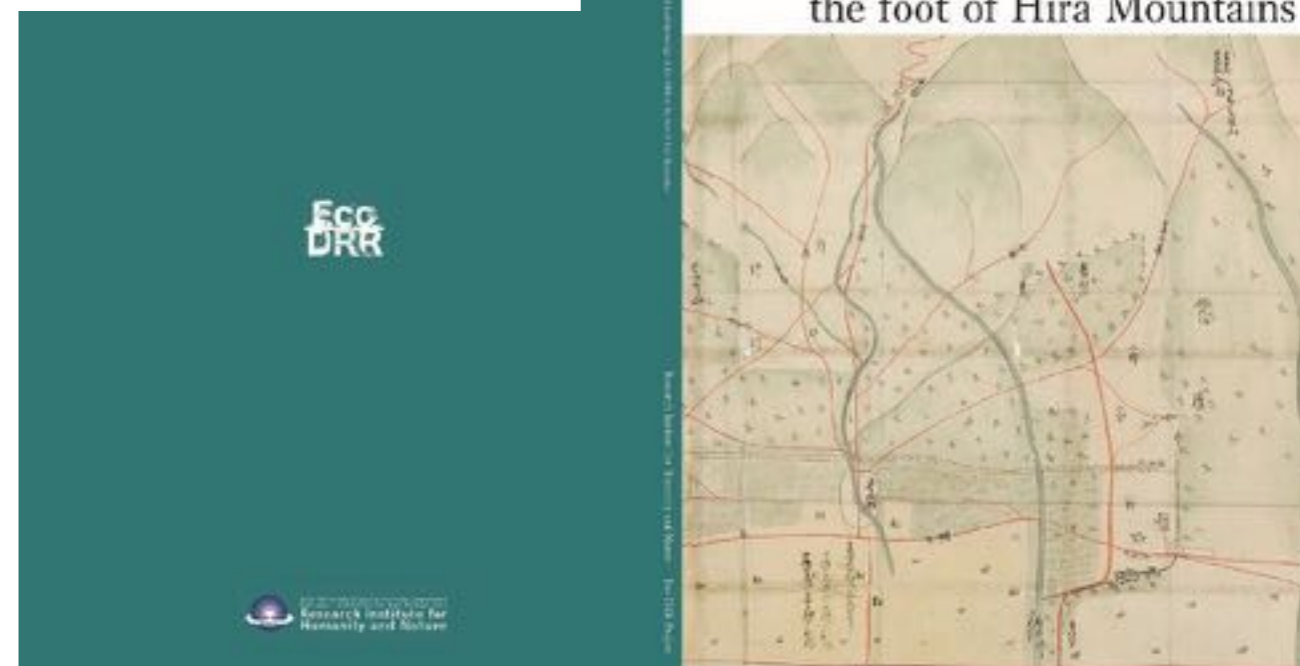
石の文化：人が石を道具、装飾、建築、信仰など、さまざまな目的に活用してきた歴史や伝統、技術、芸術、精神的な側面を含む文化的な総称。地域ごとに特徴的な「石」そして「石の文化」がある。

石：人類は約260万年前から石を打ち砕いて鋭い刃(は)を作り、道具として使用。人類の文明発展において、最も古くから重要な役割を果たしてきた。

比良山麓（滋賀県）のEco-DRR伝統・地域知

Traditional and Local
knowledge of Eco-DRR at
the foot of Hira Mountains

地域の歴史から学ぶ災害対応
比良山麓の伝統知・地域知



人々は長い歴史の中で、どのように自然の恵みや災いに付き合ってきたのでしょうか。それぞれの地域で長い時間をかけて、人が自然とつきあうための豊富な知識が蓄積されてきました。本書では地球研Eco-DRRプロジェクト研究調査地である比良山麓において地形や文化、歴史資料から暮らしを読み解くことで、地域の人々がいかに自然の恵みを利用しながら災害に対応してきたかを古文書や古絵図、写真を用いて分かりやすくまとめた書です。

<http://www.chikyu.ac.jp/publicity/publications/others/>

発行 総合地球環境学研究所 Eco-DRRプロジェクト

2019年8月

電子BOOK

南小松の古地図にみる土地利用と災害対応

京都大学

安藤 澁一
深町 加津枝

ここでは、大津市南小松で江戸〜明治時代初期に作成された絵図を中心に、当時の河川や内湖、湖岸の土地利用の実態についてみていきます。

南小松（図1）は、先の守山から湖西線でさらに北へ向かったところにあります。湖岸は雄松崎として日本の白砂青松一〇〇選にも選ばれ、夏には水泳場として多くの観光客が訪れます。その他にも、内湖やシン垣跡など、自然や人々が作り出した里山の貴重な景観を見ることができます。また、南小松にも江戸時代以降の古文書や絵図が数多く残されており、かつての土地利用や災害情報を復元することが可能です。



図1 大津市南小松（ドローンで撮影）



図2 南小松村絵図（南小松自治会蔵、写真：大津市歴史博物館提供）

まず図2の、「南小松村絵図」です。この絵図の作成年代は不明ですが、絵図左下に、当時の南小松村（石高一〇九三石余）が複数の領主（幕府・旗本等）によって分割されていたことを示す書込みがあり、それらを精査すると、およそ一七世紀の中頃と推定できます。また、隣接する村々の領主の情報や、生活域や生産活動の範囲（山林等）全体を描くなど、南小松村全体を描く明細図としての性格があったと考えられます。

では、具体的な村内の様子や土地利用の状況はどうでしょうか。絵図中には、土地利用に関する色分けの凡例があり、当時の様子を知らせてくれます。まず赤色が道で、絵図中央（南北）を走るのが村のメインストリートである北国海道です。その海道沿いに黄色で書かれた三つの集落があります。当時の南小松村は、今在家・野村・間中の三つの集落からなる村でした。無色が田畑を示し、青色が川や内湖湖です。内湖には「よし原」と書かれており、ヨシが繁茂し、人々が生活などに利用していたことが想像できます。さらに、内湖には「船入・鯰口」と書かれており、内湖が港や漁業の場として機能していたことが分かります。

一方、山手に目を転じてみると、山

林が灰色で示され、山際や入会地（佛生寺野・北比良村との入会地）の範囲を墨線で示しています。

白色の凡例で書かれている「荒流」は、絵図中では「永荒」と書かれています。永荒とは、災害のため永い間荒廃した田畑、芝地・沼地などのことであり、作物の生産能力がほとんど無いことから、領主から年貢を免除される土地です。本絵図では、永荒は北国海道より東側（湖岸）の川や内湖周辺に広がっていることから、川の downstream の洪水や内湖の増水による水害があったと考えられます。また、湖岸沿いには薄い字で田と書かれた「水所田」が広がり、冠水被害多発の田を示していることから、頻繁に水害が起こっていたことがうかがえます。

さらに、野村と間中の間を流れる大谷川の川沿いには、上流から「南北百間石堤」、「南堤百九拾間・北堤百六拾間」、「南堤式百四拾間・北堤式百四拾間」と書かれており、石を主にした堤が築かれていたことが分かります。これらの長さから、堤は河口から集落より少し上流の地点まで続いていたことになりそうです。また、野村のすぐ西側に「八幡宮」があり、堤は南側の方が三〇間長く作られています。当時の人々は洪水から集落や田畑だけな

く、鎮守である八幡神社を守ることも意図していたのではないのでしょうか。

ポイント

大谷川の堤防の拡大について

ところで、南小松の古文書には、寛政四年（一七九二）八月に、堤の普請について記載されたものが存在します。それによると、大谷川では上流で石堤が一二〇間、下流で砂堤が一〇〇〇間あったことが分かります。さらに、『近江国滋賀郡誌』には、大谷川の堤は明治一四年（一八八二）に二六町一四間（約二・八km）あったことが書かれています。このように、図2の絵図が作成されたから約二〇〇年の間に、堤は三倍以上の長さにまで拡大しています。

これらのことから、当時の人々は川からの水害に対して、堤の設置と拡大を行うことによって対処していたことがうかがえます。

現在、大谷川は家棟川と呼ばれる天井川で、上流では石堤跡と砂防堰堤が混在した様子（図3）を、下流では道の上を流れる様子（図4）を見ることができます。



図3 家棟川上流石堤跡と砂防堰堤



図4 家棟川下流道の上を流れる天井川

河川と内湖（南小松）



琵琶湖

内湖

南小松集落

家棟川

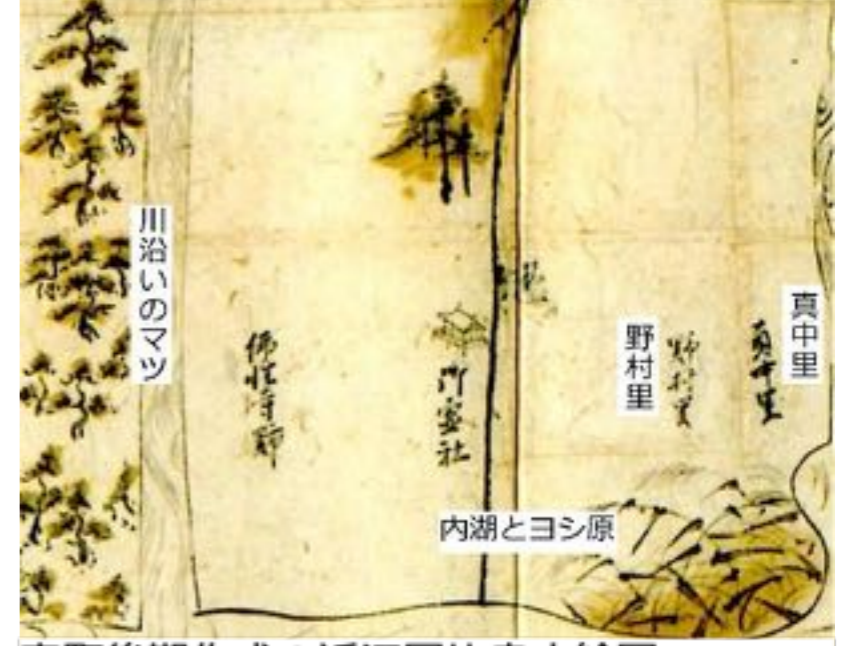


昭和30年頃の南小松の景観

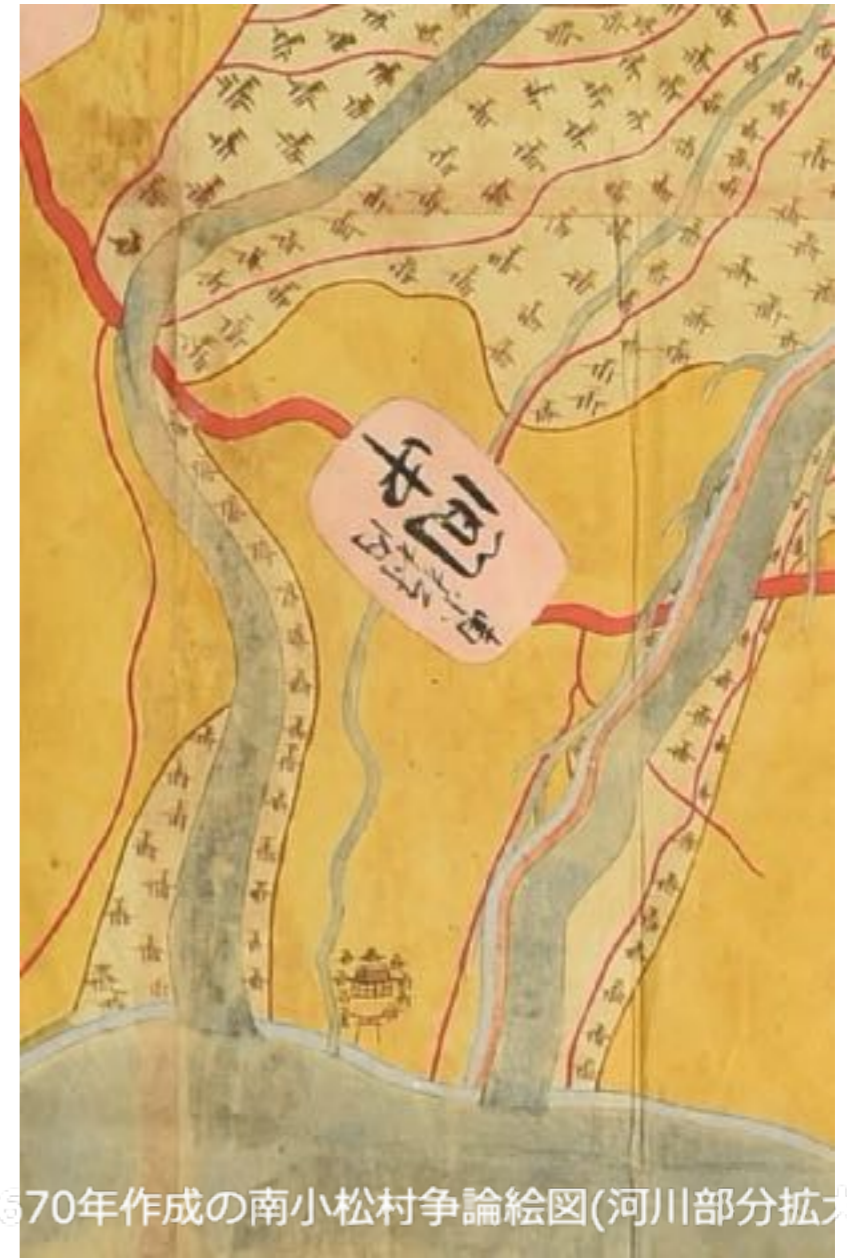
撮影：木村喜代嗣



(絵図：南小松自治会蔵、北比良財産管理会蔵)



室町後期作成の近江国比良庄絵図
(北比良図一部、志賀町史第2巻付図2転載)



1670年作成の南小松村争論絵図(河川部分拡大)

百間堤・三重堤防・シシ垣（大物・南比良・荒川）



琵琶湖

荒川

大物

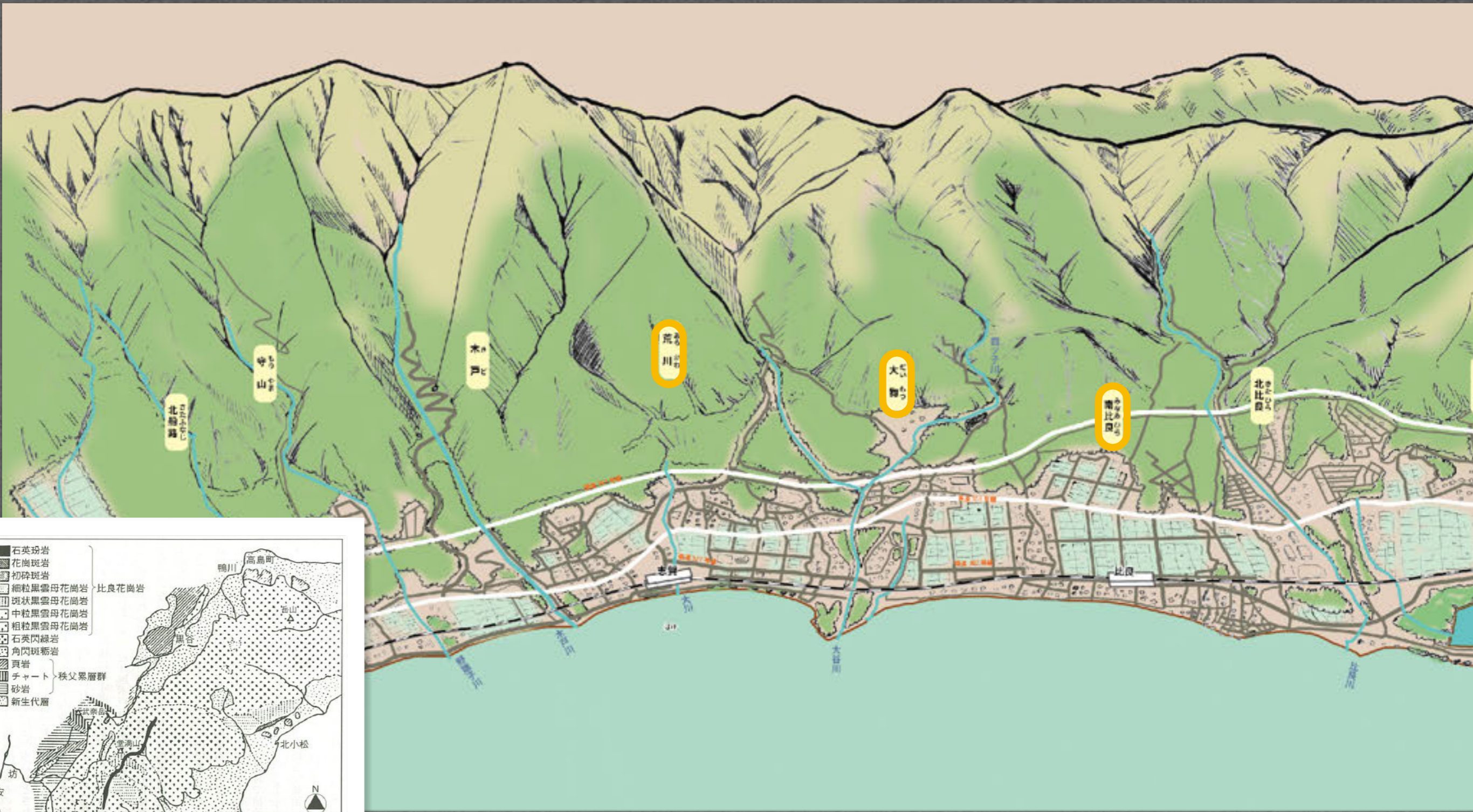
大谷川

南比良

百間堤

四つ子川

比良山麓の集落



滋賀県地質図より

百間堤

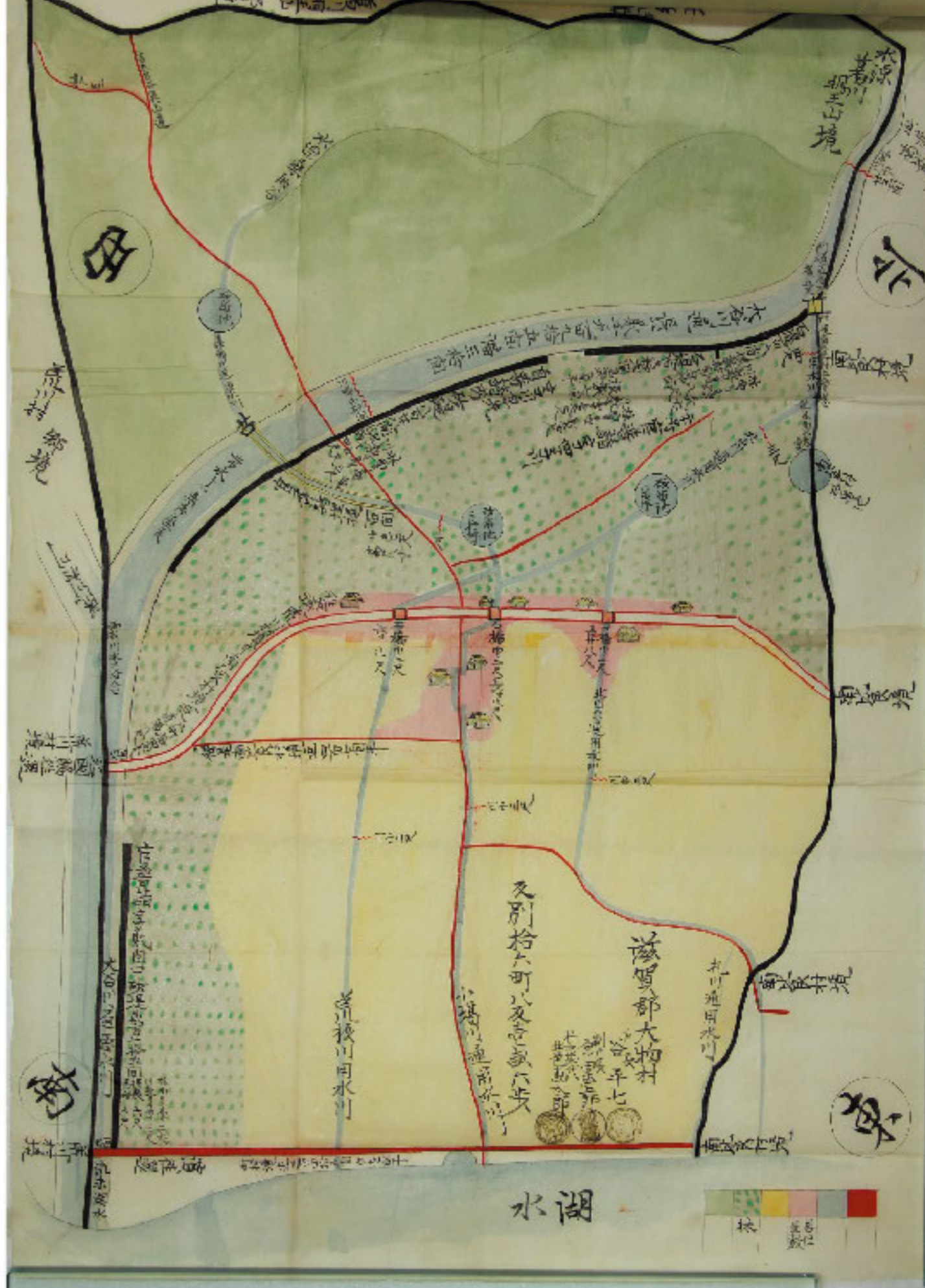
- 長さ約180m、幅約18m、高さ約9m
- 1852年の水害復旧として石工・佐吉らの指導のもと5年8ヶ月で完成
- 周囲には江戸時代より留山（砂防林）が設定され厳しく管理された
- 掘出される石（石堤部分）や松木（砂堤部分）が利用された
- 常に水害に遭う場所を家・屋敷を建設しない「流田」とした



百間堤



水門としまつ



滋賀郡大物村（1874年 滋賀県立公文書館蔵）

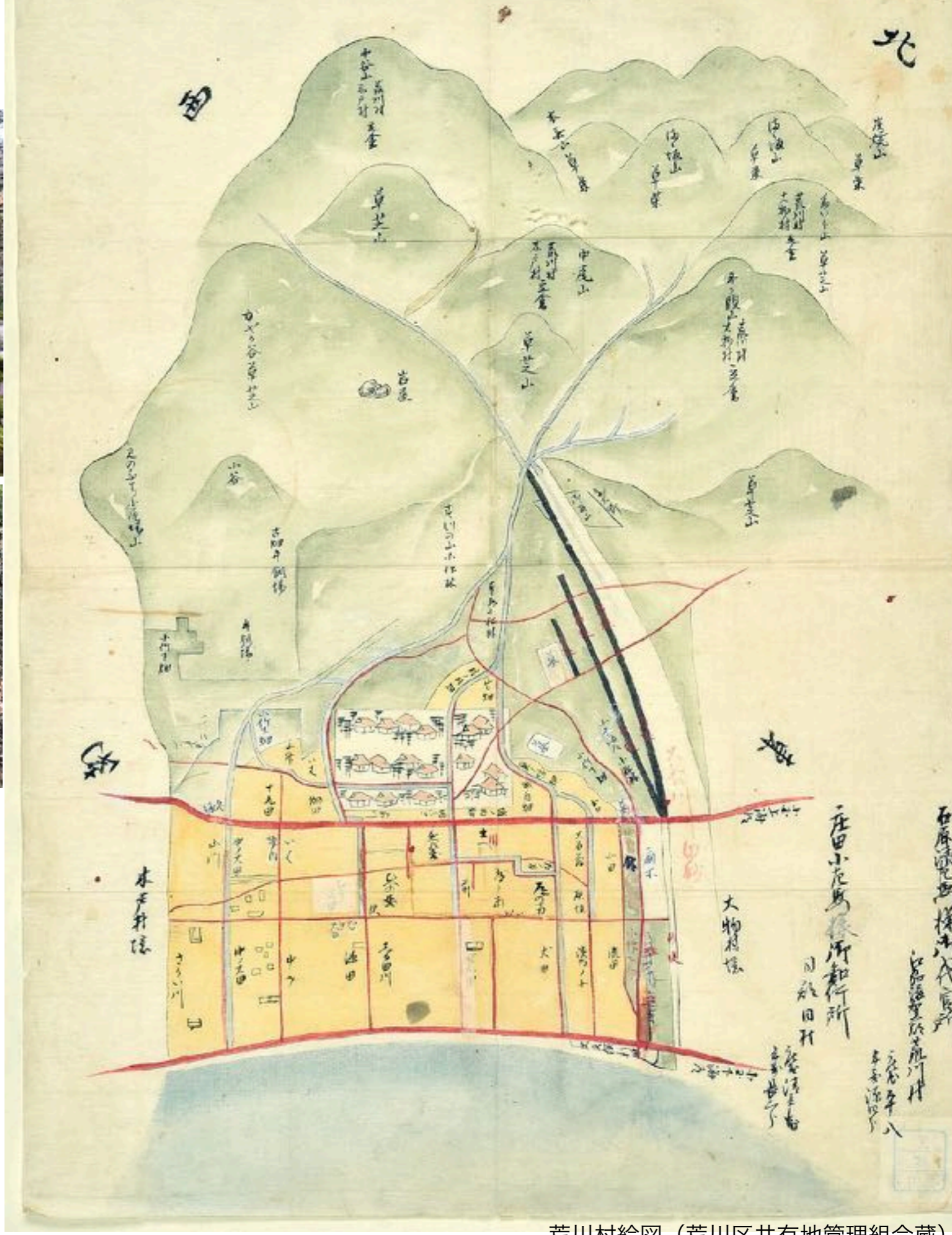
三重堤防とシンシ垣



大谷川



シンシ垣 (荒川)



荒川村絵図 (荒川区共有地管理組合蔵)



南比良ふるさと絵屏風
南比良自治会蔵

自然災害に対する比良山麓の伝統知・地域知

- 全体の土地利用の工夫（砂防林・荒地など）
- 災害に関する要所（神社など）の設置
- 所有形態の工夫
- 石材などの自然資源を利用した構造物（石堤・水路・シシ垣）
- 分散化する人工水路ネットワークの整備（生活用水・水田）
- その他（橋、切り欠き・堰板など）



比良山麓の石の文化：地域の自然災害や獣害に備えた岩・石垣



波除石（南比良）



シシ垣（南比良）



長五郎岩（守山）

比良山麓の石の文化：信仰の場の構成要素（鳥居・灯籠など）



比良山麓の石の文化：暮らしや生業を支えてきた水路・石垣など



比良山麓の石の文化：暮らしや生業を支えてきた水路・石垣など





庭にあるイケ（下流側）



庭にあるイケ（上流側）



湧水を利用
（中井さん）



お地蔵さん



住居に付随したイケ



守山地区の水環境

伝統的な組織による取り組み

用水

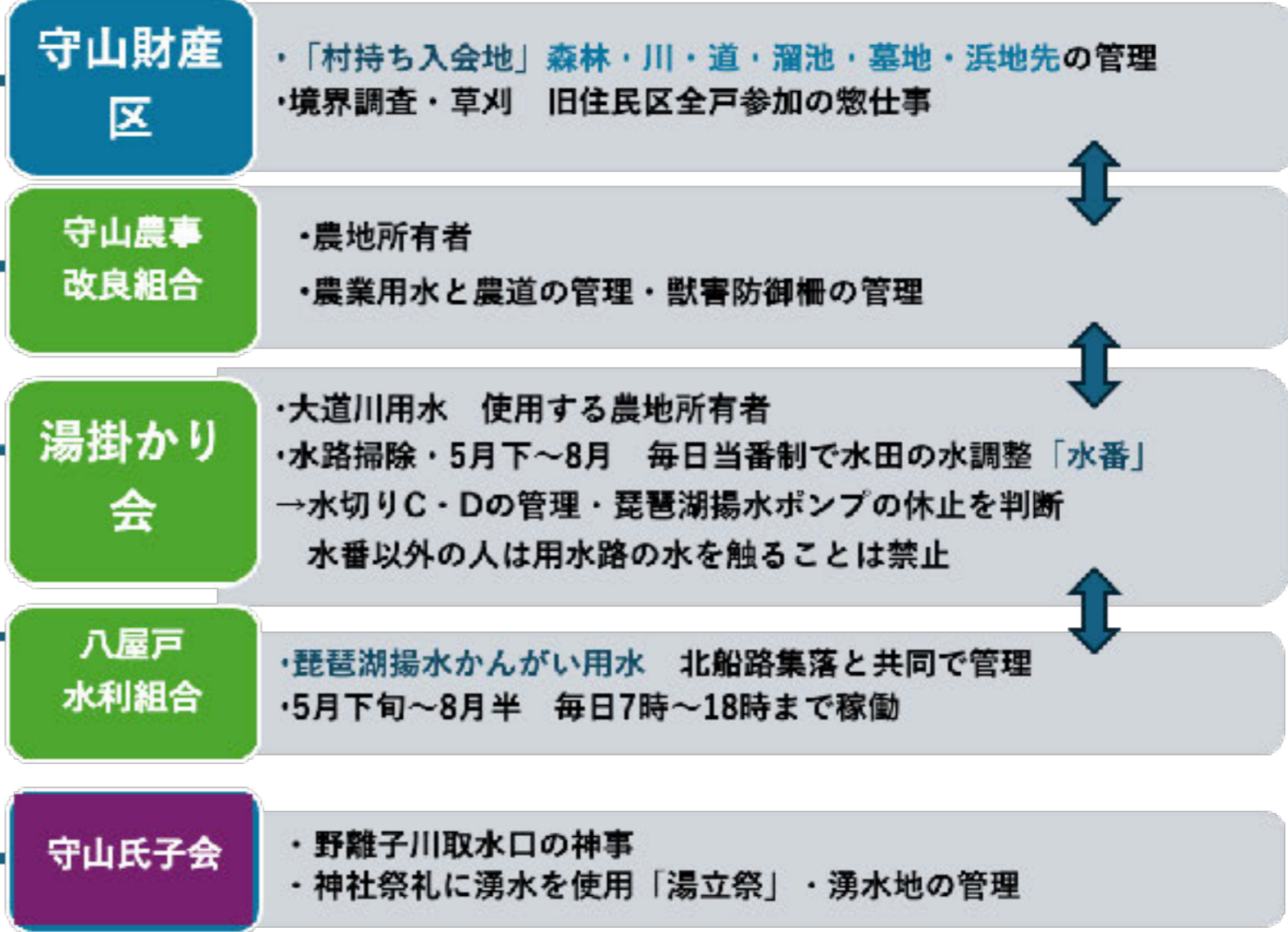
1692年頃建設
大道川用水



03 用排水管理と集落組織の管理空間とその役割

旧住民区（60戸）が「町」「宮組織」「檀家」として，守山集落全域を管理

自治組織	団体名	戸数	自然資源の利用・管理空間						構成員
			集落	田畑	水路	河川	湖岸	湖	
	守山自治会	217戸	●	●	●	●	●	●	旧(60戸) 新(157戸)
町	町会	60戸	●	●	●	●	●	●	旧
	守山財産区	60戸	●	●	●	●	●	●	旧
	守山農事改良組合	60戸		●	●				旧
	湯掛かり会	約20戸		●	●	●		●	旧
	八屋戸水利組合	70戸		●	●			●	旧・外
	道皆頭水利組合	約20戸		●	●				旧・外
	横田水利組合	8戸		●	●				旧
宮組織	守山氏子会	51名	●		●		●		旧
檀家	西福寺檀家	70名	●				●		旧



- ・ 自然資源の位置や規模，重要性に応じて共同管理を行う仕組みがある。
- ・ 道や水路・農地や森林の利用・管理，祭礼行事の執行，自然災害への対処
- 住民の生活，生業に不可欠な活動を続けてきたことが明らかになった。

市民組織・教育機関による取り組み



石組みの川復活プロジェクト



生水の流れる川づくり



百間堤でのプログラム（志賀北幼稚園）

対象地域：滋賀県

再生課題：南小松沼（内湖）ならではの環境や景観、文化の保全・再生と積極的な活用



みなみこまつぬま（ないこ）

南小松沼（内湖）自然再生協議会

再生
目標

南小松沼をとりまく自然と人のつながりの再生と活用

- 事務局：南小松沼（内湖）自然再生協議会
- 対象地域：滋賀県大津市南小松沼とその周辺
- 協議会：R4.11.23 設立
- 全体構想：R8.1.19 策定（R8.3 現在）



南小松沼は琵琶湖の沿岸の内湖であり、滋賀県大津市比良山麓に位置します。南小松沼は周辺の河川や砂州、湿地などと一体となって、貴重な自然環境を育むとともに、人々に多様に利用され地域文化と深く結びついてきました。

しかし、開発など人間活動による影響で河川-南小松沼-琵琶湖の連続性が失われています。また、暮らしや生業と結びついた自然資源の利用や生態系管理がほとんどなくなり、外来生物の問題も深刻です。

本協議会は、南小松沼と周辺の自然、人との関わりを見直し、創造し、将来にわたって南小松沼の恩恵を活かす地域づくりを目指します。

自然再生の手法

- 多様な動植物が共存できる環境の再生と保全
- 健全で美しい環境や景観を活かした地域づくり
- 身近な自然資源を活かした地域文化の伝承と創造



聞き書きワークショップの様子



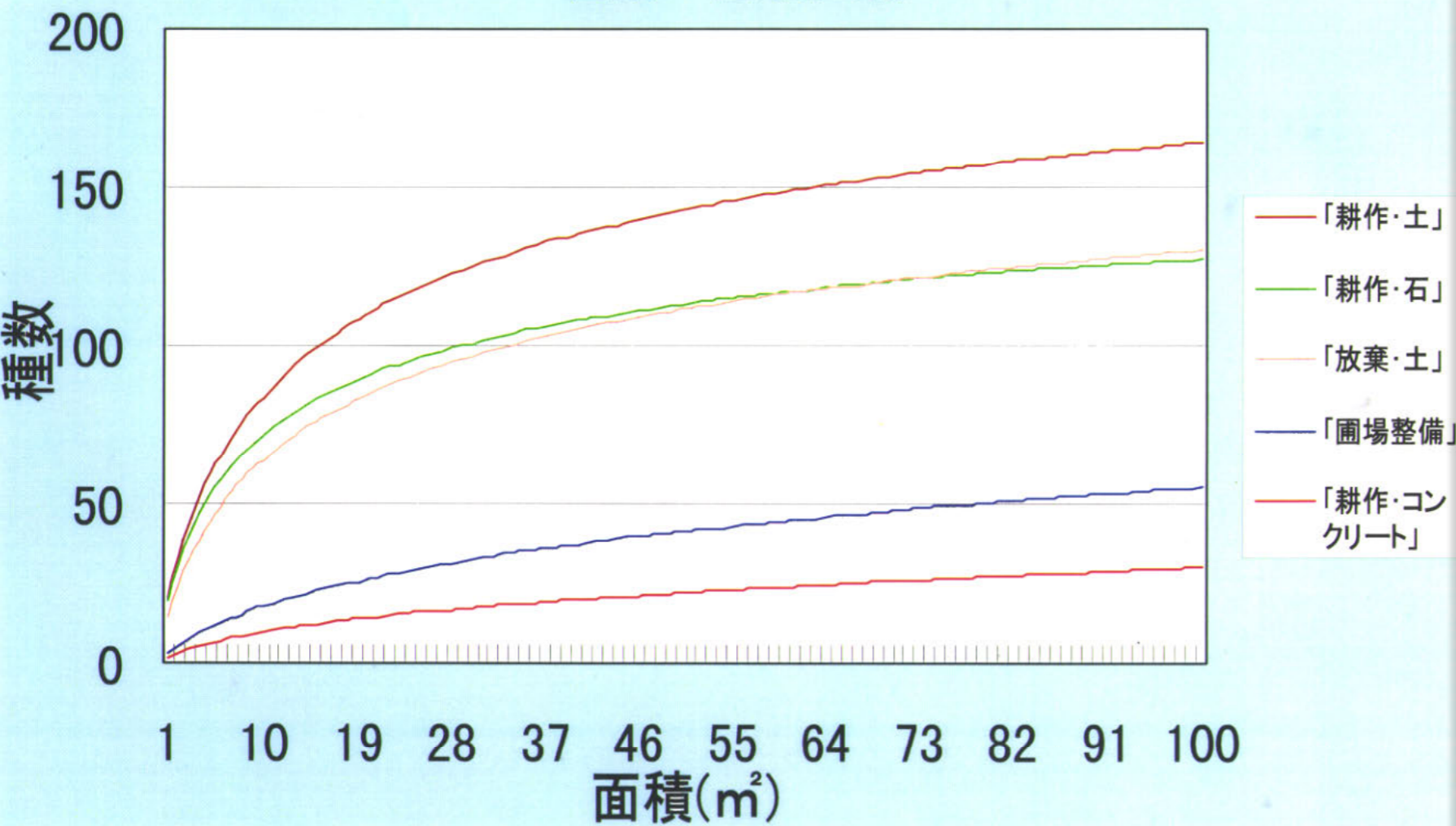
魚類調査



ヨシ刈の様子

研究機関による取り組み

種数-面積曲線



暮らしや生業と結びついた生物文化多様性



出現したトンボ・蝶類・植物

What Is This Project About?

We lease rice fields that have become difficult to manage and, under the guidance of local farmers, engage in the full cultivation cycle from planting to harvest. Our members include local residents, students and faculty from universities and other educational and research institutions, companies, and volunteer groups.



River Cleaning

Rice planting Details

23rd / 24th May 2026 : Machine rice planting (we will plant by hand in places and corners we cannot reach by machines)
6th and 7th June 2026 : Manual Rice Planting.



Weeding



Rice Harvest



Rice Harvest



Rice Planting

[What to Bring / What to Wear]

- Clothes that are easy to move in and can get dirty.
- Field shoes recommended (No wellies as they can get stuck in the mud and slip off) or something to protect your feet, such as thick socks you do not mind throwing away.
- A hat or similar to protect against heatstroke.
- Drinks.

In addition to farming methods that use machinery and fertilisers, we also practice traditional, low-pesticide cultivation through manual work.

Last year, we held a variety of activities using the rice we harvested and local natural resources. Our activities go beyond rice planting, and we welcome participants of all backgrounds.

Rice fields not only provide food, but also nurture a rich ecosystem and bring people together within the community!



Traditional Rice Drying



Rice Harvesting



We look forward to welcoming you!!

Access to the rice fields: **By train**, get off at JR Kosei Line "Horai Station" and walk for 19 minutes.
By car, it is about 4 minutes from the Kosei Road "Shiga IC."

Contact: Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University, Prof. Katsue Fukamachi
Email: hukamachi.katsue.2e@kyoto-u.ac.jp

Note: In case of weather change, please contact Professor Fukamachi.

石の文化への関心がもたらすもの

● 背景

伝統知・地域知の活用、防災対策の必要性、地域コミュニティの取り組み、公共事業への展開

● 実践

→研究機関、地元や市民組織などによる石の文化に対する認識、再評価

→解説版の設置、石の文化Map作成、博物館での展示

→市民活動のプログラム、教育機関のフィールドワーク、体験型観光、国内外からの視察

→行政施策との連携の可能性（文化的景観、シガパーク、流域治水、生物多様性の保全など）

● 参加者

地元住民、市民組織、来訪者、教育機関、博物館、行政、専門家、国際機関など

● 得られるもの（今後に向けて）

石の文化に関わる恵みや脅威に対する理解・対応力の広がり、深まり

世代間の知識・体験の継承、関係性の構築、参加型公共事業への展開

「関係性を編み直す社会的プロセス」への眼差し